

# チェルノブイリ通信

チェルノブイリ支援運動・九州

事務局：北九州市小倉南区徳吉東1丁目13-24

TEL/FAX 093-452-0665 深江 守

No. 8  
1991年9月20日 新

「チェルノブイリ通信」No.8をお届けします。今回は「お待たせしました！チェルノブイリ報告集。好評発売中！」ということで、ようやく出来上がった「6年目の汚染地を訪ねて、第一次医療調査団報告」集の案内がメインということになります。個人的には、ですが、というのも、報告集を「何部製本しようか」ということで、私としては2000部は作りたい、と言ったのですが、事務局会議の中で誰も支持してくれなかったのです。「取りあえず1000部作って、完売できたら増刷しよう」ということになったわけです。「2000部は売れる」という具体的な販売ルートを私が提示出来なかったことがその原因なのですが、今出来上がった報告集を見ながら、「2000部どころか3000部でもすぐに売れてしまうに違いない」と確信しています。本来なら、会員には全員報告集を届けなければならないのですが、送料も含めればそれだけで年会費分になってしまうという現実的な問題があります。そこで是非会員の皆さんには一部ずつ購入していただくというのはもちろん、2部

でも3部でも広めていただければと思っています。例えば、この報告集を4000部売ることが出来れば100万円の益金が支援運動に入ってくることになります。一人が何十冊もというのでは無理がありますが、一人5冊以上申し込んでいただければ、かなり現実的な線として見えてきます。是非、よろしく願います。また、「チェルノブイリ支援コーヒー」の方も引き続き取り組んでいます。こちらの方も中々の評判で、知らず知らずのうちにかかなりの収入が上がっています。コーヒーと報告集の売り上げだけで血液分析機ぐらいは買いたいものだと思いますのでよろしく願います。ということで今回の通信は報告集の案内がトップにきていますが、その他には、ジトミールスキー・ピースニック新聞社の編集長ネチポレンコさんとジトミール州子供病院の小児科医アルチュフさんを招いて宮崎市で取り組まれた「チェルノブイリ講演会」の報告を宮崎の青木さんに書いてもらっています。また、各地で取り組まれている「チェルノブイリ報告会」（河野、田宮、深江による）の報告

を代表して福岡の田宮さんに書いてもらいました。7月から8月にかけてほぼ九州を一巡しましたが、まだ何ヶ所か報告会が開けていないところがあります。とりあえず報告集が出来上がったのでそれを読んでもらえば分かるのですが、生の話も聞いてみたいという時はいつでも声をかけてください。すぐに飛んで行きます。

9月8日、四国の愛媛に行ってきました。「チェルノブイリ救援・えひめ」の一周年総会に出席するためです。6月チェルノブイリを訪れるさい、「救援・えひめ」から30万円の募金を託されました。自分たちの代わりに支援物資を届けてほしい、というものです。その報告も兼ねて松山へ行ってきました。その折、いわゆるチェルノブイリの被災者に対する支援の運動と日本の原発、もつと言えば、自分たちの住んでる町の近くにある原発を止める運動との整合性（一方に力を入れれば一方が疎かになる。あるいは結果としてその両方も）の問題について相談を受けました。これは、愛媛だけの問題ではなく、九州も、あるいは全国的な意味でそうかもしれません。

今日本には現在40近いグループがチェルノブイリ支援の運動に関わっているといえます。九州や中部のように地方で一つのグループであったり、あるいは地域ごとだったりです。その意味では、全国各地に点在しているといっていると思います。それだけチェルノブイリの問題を自分たちの問題としてとらえている訳です。ところが日本でもチェルノブイリ以降、かなりきわどい事故が頻発しています。また、青森県六ヶ所村にはチェル

ノブイリの数十倍、数百倍の被害をもたらすかもしれない「核燃サイクル施設」の一部が動きだそうとしています。こうした状況に対して、何ら有効な反撃、「否」と表現できない私たちの運動がまさにそうなのだと思います。最近よく反原発運動の低迷を指摘されます。そのたびに「そんなことはない」と自分に言聞かせていますが、いよいよ「ウラン濃縮工場」が動きだすかもしれない、という話が伝わってくると、「ウーン」と唸るしかありません。これが、私たちの現実なのかと。

悲観してばかりも居られません。そこで10月の行事案内が次にきます。多少なりとも運動の輪を広げ、チェルノブイリの今を、日本の原発の今を伝えていきましょう。

核燃の白紙撤回を！

とめよう核燃10月共同行動

7月25日、青森県・六ヶ所村は、日本原燃産業とのウラン濃縮工場に関する安全協定を締結しました。

これにより原燃産業は、9-10月にも六フッ化ウランの六ヶ所村への搬入と、ウラン濃縮工場の試運転を計画しています。危険な核物質六フッ化ウランは、東京から東北自動車道を経て青森県内を走り、六ヶ所村まで運ばれます。搬入と試運転は、核燃料サイクル計画の具体化の第一歩です。

核燃は、日本が将来にわたって原発をつくり続けていくため、そして原爆をつくるためのものです。核燃は絶対に認められません。

10月5日、6日に「核燃の白紙撤回を！ 10月共同行動」が青森市と六ヶ所村で行われます。濃縮プラント施設の運転を許すことは核燃サイクル施設を認めることでもあります。第二のチェルノブイリを現実のものとしないうためにも、一人でも多くの方が青森に集まって下さい。一緒に核燃を止めましょう。

◇ ◇

- 10月5日(土) 青森市文化会館  
6日(日) 六ヶ所村反対派農民の  
土地で集会  
7日(月) 原燃・六ヶ所村への申し入れ

連絡先 Ⅷ 0177-43-0824(西館庄吉)  
Ⅷ 0177-28-1686(小林 典)  
Ⅷ 0172-35-9588(放出 倫)

チェルノブイリを繰り返すな

イーゴリ・コスティン写真展

チェルノブイリ原発事故から5年が経過しました。ノーボスチ通信社の特約カメラマンのイーゴリ・コスティン氏は、事故直後にヘリコプターで事故炉上空から

現場を撮影し、それ以来今日まで、事故処理のすべての段階を、そして避難民たちの苦悩、さらにすべての命あるものに押し寄せた悲劇を、克明に撮影してきました。その結果、彼は大量の放射線を浴びて健康を損ねるまでになりました。

1990年8月にソ連を訪れた「市民によるチェルノブイリ事故調査団」のメンバーは、キエフでコスティン氏に会い、彼の体験談を聞き、作品を見せてもらいました。「調査団」のメンバーは、この写真を借り受け、できるだけ多くの人にこの悲劇を伝えるために、日本で公開したいと申し入れました。コスティン氏はこの要望を快く聞き入れてくれました。調査団のメンバーは、未公開写真を含む彼の代表的な作品50点を1年間の約束で借り受け、全国で写真展を開催することにしました。九州では、グリーンコープ連合が窓口となり、10月9日の北九州市を皮切りに、久留米市、佐賀市、長崎市、熊本市、鹿児島市、大分市でそれぞれ開催されます。

私たちは、二度とこの悲劇を繰り返さないために、コスティン氏の写真を通して、できるだけ多くの人々にチェルノブイリ原発事故の悲劇の実態を伝えたいと願っています。

また、北九州で活動を行っている市民グループ「写真の会」が、玄海原発のヒアリングなど、九州における反核運動を写真でつづるパネルを出展する予定になっています。さらに、今年の6月にチェルノブイリ被災地を訪れた「チェルノブイリ支援運動・九州」医療調査団が現地で撮影してきた写真も、同時に展示する予定です。

日程については以下の通りです。是非  
ご参加ください。

◇ ◇  
10月 9日(水) 戸畑市民会館  
10日(木) 水巻中央公民館  
11日(金) 立岩総合公民館  
(飯塚市新飯塚)

写真展 午前10時～午後8時  
講演会 ①午前10時30分～  
②午後7時～  
※但し10日(水巻)の一回目  
の講演は午後2時からです。  
参加費 一般800円、中高生500円

10月12日(土) 久留米勤労婦人センター  
写真展 10:30～17:00  
参加費 無料

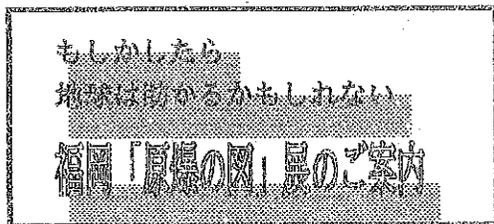
10月13日(日) 熊本県婦人会館  
14日(月) 熊本県婦人会館  
写真展 10:00～17:00  
参加費 500円 (報告会あり)

16日(水) 佐賀市民会館  
写真展 10:30～15:00  
参加費 300円 (報告会あり)

19日(土) コクラヤギャラリー  
20日(日) 住吉店3階(長崎市)  
写真展 10:00～19:00  
参加費 無料

26日(土) 三越ブリックギャラリー  
27日(日) (鹿児島市)  
写真展 10:00～19:00  
参加費 300円(藤田佑幸講演会)

29日(火) 大分コンパルホール  
30日(水)  
写真展 10:00～21:00  
参加費 200円 (報告会あり)



10月2日から13日まで、福岡市美術館にて、丸木位里さん・俊さんの共同制作になる「原爆の図」の展覧会が開かれます。

今回は、多くの作品の中から、原爆・南京・沖縄をテーマとした作品を中心に展示するとのこと。

多くの方のご来場をお待ちしています。

10月2日(水)～13日(日)  
午前9時30分～午後5時30分  
(但し入場は5時まで。7日は休館日です)

福岡市美術館(福岡市中央区大濠公園  
TEL 092-714-6051)  
入場料 一般 当日900円  
小中高生 当日500円

※ 10月1日(火)に丸木ご夫妻を迎えて大手門会館にて講演会が行なわれます。(賛助会員は無料です)

連絡先 福岡市中央区高砂2-1-21  
TEL 092-523-6271

## チェルノブイリからのメッセージ

たみや けいこ

今年6月の現地調査から帰ってきて、約2ヵ月間はそれぞれ「平和の夏」で、福岡ではイベントが多いので、私は調査報告の原稿書き（新聞、ミニコミの）に専念して、報告会はしませんでした。その間に、大分の河野さん、北九州の深江さんは精力的に報告会をこなしているという風の便りを聞き、もう私の出番はないのかと思っていました。そうは問屋がおろさない？。8月29日の福岡市南区「アミカス」を皮切りに、あっという間に十数ヵ所も回らなくなりました。それだけチェルノブイリへの関心は高いのでしょうか。

はじめは淡々と、見たこと、聞いたことを伝えていましたが、それだけではかえって真実が伝わりにくいことに気が付きました。というのが、チェルノブイリ現場で私が見たことというのは、ただ、その場に居ただけで衝撃的という訳ではないからです。目の前でバタバタ人が倒れたり、死んでいくという状況ならともかく、じわじわ被曝していくという放射能被害の恐さというのは、想像力でしかわかりませんから、その想像力を引き出すための「言葉」が必要になってくるのです。つまり、それは私自身が現場で経験したことを「私がどう感じたかということ伝える」作業なのです。

現地で出会った事の中に、「まだ3才なのにあと1ヵ月という寿命を宣告された白血病の少年ミーシャくんのこと」があります。彼には薬品が手に入り、それなりの治療をすれば、快方に向うかもしれない可能性がありました。しかし、薬品は手に入らず、ミーシャくんは本当に1ヵ月で亡くなりました。その話はそれ自体、非常に衝撃的ですが、事例としてその子の話を私たちが出会った「1件の事実」として話しても、それはどこにでもある話でしかないのです。けれども、そういう子供たちがチェルノブイリ周辺にはたくさん居るのです。そして、私たちが募金を集めて薬品を送っても、それで救われるのはほんの一握りでしかないでしょう。

40キュリー以上あるというホットスポット（点在する高汚染地のこと）の存在する土地に住んでいる家族にも会いました。この家族は、ホットスポットの存在を知り、移住したいと思っているけれども、資金も行くあてもなく、土地平均では12キュリーしかないので政府の援助も受けられず、どうすることも出来ないのです。この家族には幼い子供があり、子供たちはこの土地にいただけで被曝し、健康を損なうことはわかっているのです。いいえ、すでに症状がでていました。どんな思いで毎日を過ごしていることでしょうか。この話もまた、大変な話ではあるけれども、私たちが出会った事例としては1件しかないわけで、それだけ話ても「今までにも、どこかで聞いた話」でしかないのです。しかし、この話もまた、事実としては、実にたくさんあるのです。白ロシアだけでも、230

あなたの手をさしのべて下さい

# 6年目の汚染地をたずねて

第一次医療調査団報告集 — チェリブグリ支援運動・九州

調査訪問期間 91年6月13日～22日

## 様々な視点からの報告

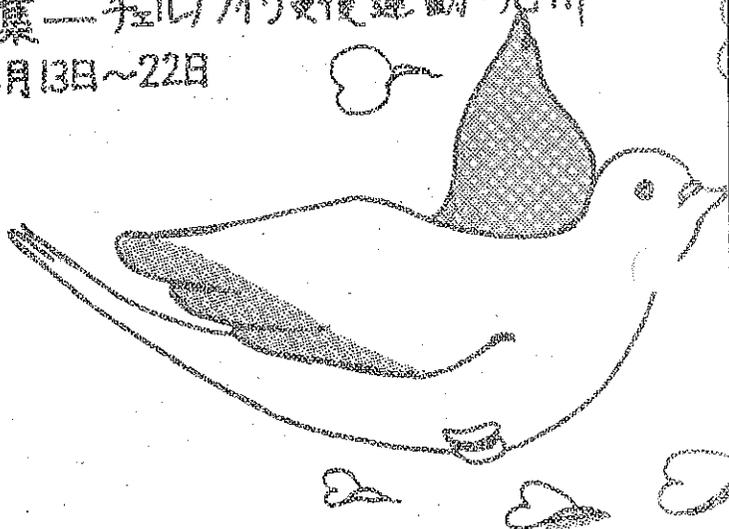
主婦の目から  
河野近子さん  
田宮京子さん

医師の目から  
伊勢泰さん

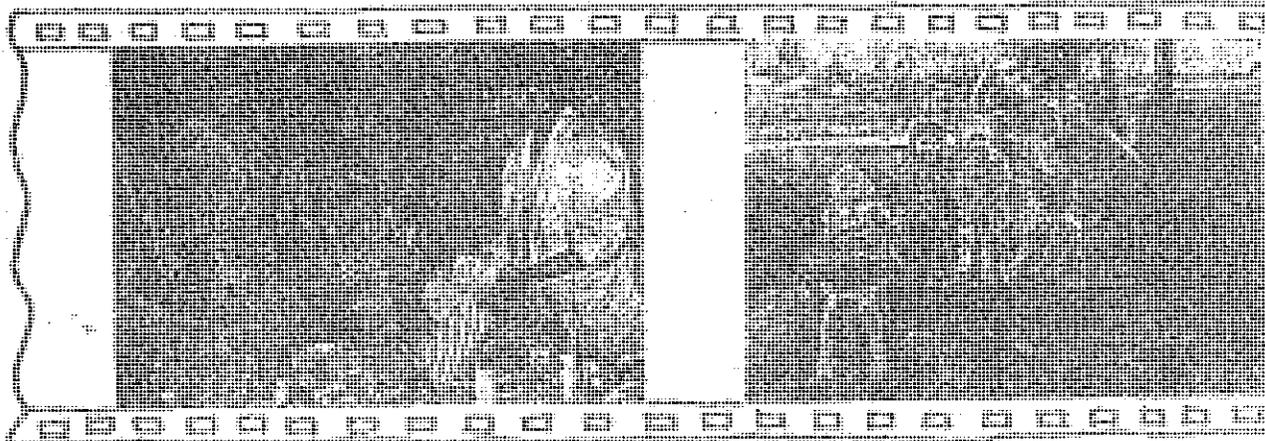
ジャーナリストの目から  
占部正彦さん

そして団長  
深江守さん

調査団に関する各新聞  
記事も併載しています



この報告集は、昨年夏以来続けられてきたチェリブグリ支援運動・九州による第2回目の支援物資送達に伴って、汚染の現地をたずねた市民が見たまま感じたままを綴った文集です。代表たちが会った切尾ミーシャは1ヶ月後に白血病で亡くなりました。この報告集が市民によるチェリブグリ事故被害者支援の輪を更に広げ、より強い運動の行動を起す契機となることを願います。



1. 支援ルートができました。

進行

頒価 500円

B5判78頁 写真多数

頒価の約半額は基金として  
支援運動基金に積み立てられます

郵送もします。下記へご連絡を。

深江 守

北九州市小倉南区徳吉東1-13-24

(Tel-FAX) 093-452-0665

鶴田 かず美

福岡市南区塩原4-5-8-337

(Tel) 092-541-9272

5都以上まとめてご注文の場合、郵送料は事務局にて負担します

万人くらいが汚染地に住んでいるといわれます。そのほとんどの人がこの家族のような思いを抱いて生活をしなければならぬのだということを伝えねばなりません。そして、やはり、この家族だけを助けられても、ほかの多くの人たちまでは手が回らないでしょう。

ミーシャくんの話もホットスポットの家族の話も、これらは、たくさんいるチェルノブイリ被災者のほんの一部の話ではないことを、私は数字を出しながら話します。そして、報告者も聞く方も、たどりつくのは絶望的な無力感です。これから何万人出てくるか分からない放射能被害者たち、移住すべき数百万人の人々にとって、私たち市民グループができることといえば、ほとんど僅かなことなのです。私たちはなんと無力なのでしょう。ミーシャくん一人「救うことできない」のです。

さて、しかし、私たちのグループ名は「チェルノブイリ支援運動」です。私たちは「支援者」なのです。実は、このグループの名前を決めるときに、ずいぶんもめました。「チェルノブイリ救援」というのが、一般的に使われていましたから、九州でもはじめはこの名が候補に上がりました。私はそれがイヤでした。「上からお救いする」みたいな印象が「救援」にはあったのです。去年、私たちはまだ報道でしかチェルノブイリのことを知りませんでした。それでも、チェルノブイリの人たちを「救う」なんて、とてもできないだろうと思ったのです。でも、どこか、そういうのは「屁理屈」かなあという迷いもありました。

それが今度、実際にチェルノブイリに

行ってみて、やはり、私たちは「支援者」なのだ改めて思いました。「救う」ことはできないかもしれない。でも、精一杯「支え、援助していかなければ」と思ったのです。小さな支えです。でも、ウクライナの、そして白ロシアの人たちは遠い日本から仕事や家庭をおいて、自分たちのお金で出かけていった私たちの心をととても大事にしてくれました。政治や駆け引きでない私たち「チェルノブイリ支援運動」の活動を理解してくれたのです。

ただ、お金を集めて送るだけでないこの支援運動の意義は大きいと、私は報告会で一人一人の顔を見ながら思っています。そして、人を救うことの出来ない非力な私たちだからこそ、チェルノブイリのような事故をいつ起こすか分からない原発は止めなければならないと、強く思うのです。事故が起こっても何も出来ない私たちだから、そして、すでに出てしまった犠牲者たちを思えばこそ、「原発をやめようよ」と、言い続けなければならないのです。

チェルノブイリ原発……たった一基の原発の事故が、どれだけ多くの人たちの悲劇を生み、国土を丸ごとだめにしてしまったかを、私たちは伝える義務があります。チェルノブイリの人たちは口を揃えたように言いました。

「この事実をひとりでも多くの人に伝えてください。」

ウクライナ共和国ジトミール州からネチポレンコさん・アルチュフさんを迎え、  
チェルノブイリ講演会・交流会……《宮崎》



「何が足りないかと言うより、  
あるものを言った方が早い。」

’91年8月9日、46回目の長崎原爆の日。ネチポレンコさんとアルチュフさんに会える日がやってきた。ヴァレリー・ネチポレンコさん、36歳、ウクライナ共和国ジトミール州のジトミールスキー・ヴィースニックの編集長。ライサ・アルチュフさん、44歳、ジトミール州立子供総合病院の小児科の女医さん。チェルノブイリ支援寄金・宮崎主催の講演会のため、宮崎に来てもらうことになったのだ。会場は宮崎県医師会館である。

(略)

みんなは会場の外で受付の仕事をしている。それに、準備で疲れて聴く気にならないらしい。私もいっぺんに疲れが出て、外の空気を吸うためしばし会館入口にたたずんだ。少し間をおきスライド映写室にいった。そこからは会場が見渡せ、講演の声も専用スピーカーを通して聴けるようになっている。ここでしばらく講演に耳を傾けることにした。もうネチポレンコさんの講演も、大分進んでいるみたいだ。豚の写真を取り出して説明している。ナロジチで生まれたという、頭が一つで胴体が二つの子豚の写真だ。映写室の窓からのぞき込む。ナロジチはジトミール州北部にある高汚染地の代名詞になっている町である。避難地域になっているが、まだ人が住んでいる。この他に

8本足の馬も生まれたという。カボチャの茎がすごく大きくなっている写真も取り出した。

「奇形」。気になる言葉だ。遺伝子が放射線を浴びると、遺伝情報は断ち切られたり変形したりして間違った情報を伝えてしまう。動植物にそれが現れているなら、当然人間にも考えられる。気が重い話だ。脱原発・反原発の動きの中には、大義名分の一つに「放射能を浴びると、知恵遅れや奇形の子が産まれたりするから原発に反対。」というものがある。事実ではある。しかし、落とし穴もあるように思う。へたすると、優性思想に結び付きかねない。いわゆる「障害」者の人たちは、この言葉をどう聞いているのだろうか。多分、どれほどかこの言葉に傷ついていることと思う。自分の存在そのものが、否定されていると思うかもしれない。幸い、私のまわりには「障害」者や「障害」者問題に取り組んでいる人が多い。克服すべき課題として肝に命じておきたい。

割りとゆっくりしたネチポレンコさんの話が終わり、変わってアルチュフさんの番だ。案内の言葉がないのに気付く、あわてて映写室を飛び出したが間に合わず、なんとなく始まってしまう。まですってしまった。少し早口のアルチュフさんが話し始めた。数字が多い。会場の座席に座ってメモをとることにした。翌日宮崎のお医者さんたちと

交流会をもつことが、今朝決まったばかりである。看護婦のOさんが努力したおかげである。地域医療の現場に身を置く彼女は、ジトミールの困難さを人一倍感じているのだろう。この一週間、あちこち走り回っている姿を電話の向こうに感じる事ができた。翌日の交流会の進行役は、彼女に頼みである。成功してほしい。医療現場を知る者同士、伝えられることがあれば伝えてほしい。アルチュフさんの講演、疲れているせいかメモをとることばかりで頭には入ってこない。隣の席のYさんがしきりに話しかけてくるが、まだゆっくり対応できる余裕が戻ってきていない。ごめん、Yさん。だいたい私は、視覚的・映像的人間だ。聞く、話す、書くの国語的なものはまるで苦手ときている。後でゆっくりテープでも聞かせてもらうことにきめたが、メモだけはとることにした。合併症という言葉が多い気がする。免疫力低下などで、いろんな病気にかかりやすくなっているのだろうか。ミーシャのことにも少し触れられた。深江さんたちが6月の訪ソの時、病床にあり同行された伊勢泰医師が若年型慢性骨髄性白血病と診断された3歳の男の子だ。アルチュフさんは、主治医だった。原因が放射能とは断定できないかと断って、来日の直前に亡くなったことを告げられた。顔を知っている深江さんたちにとっては、私たち以上に残念なことだっただろう。

ほどなく、予定より早めに講演が終わった。

(略)

交流会である。向かって右にネチポレンコさん、左にアルチュフさん、真ん中が通訳である。全体で17~8人ほど。二人の紹介を終わって進行役のOさんにパトタッチ。医師のMさんが講演の感

想を述べられる。その隣は、初めての女医のEさんである。二人ともチェルノブイリ周辺で大変なことが起きていると驚かされているらしい。すぐぐ医学的な話には、入りにくそうだ。みんないろいろ聞きたがっているのだ。私も聞きたいことがある。質問してみることにした。日本の“みそ”に関してである。みそと放射能、なんとも変な取り合わせである。みその放射能にたいする効果は広島、長崎の被爆者や医師らの体験として語り伝えられている。特に、長崎の秋月医師らの体験報告が知られている。ヨウ素にたいしてはだめだ。セシウムにたいして効果があると言われる。最近ラットを使って排出効果が確かめられているのだ。タンパク質やバクテリアを含んでいるからだろうか、さらなる研究が望まれるところだ。もちろん、放射能にはいろんな核種があるから、セシウムだけではだめなのだが。ウッカも同じような作用があるらしい。アルチュフさんに、知っているか聞いてみた。みそに関してはどうか分からないが、科学的には研究つくされていないかと条件付きでいろんな植物の名前を上げられ始めた。ある種の土にもおなじような作用をするものがあるらしい。民間療法も含め、いろいろ調べられているのだ。やっぱり医者だ。ウッカは、他の食べ物や飲み物をを一緒にするとだめらしい。タバコも吸えないらしい。一緒だと逆に放射能を取り込むみたいだ。除染作業中にウッカをいっぱい飲んだ作業者たちは、逆に放射能を取り込んでしまったのだろうか。宮崎の焼ちゅうも少しは効くかもしれないと思ったのだが。

みその研究データがあれば、ありがたいのだが無い。少々残念である。通訳は、今日はきげんがいい。昨日は何か頼むたびに一言が返ってきてい

た。宮崎が気にいったのだろうか、それとも公務からもうすぐ解放されるからか。いずれにしろ、人はきげんがいい方がいい。専門用語がいろいろ出てきているはずなのに助かっている。

ネチポレンコさんに聞いてみた。あの除染作業従事者の死者数7,000のことである。いろんな団体などが独自のデータでばらばらな数字を発表しているらしい。今後1~2年のうちに、いろんな団体が協力して正確な数字が出せること期待しているみたいだ。要するに今は正確な数字は、だれもあげることができないと言う。しかし、実感としては7,000という数より多いと感じているみたいだ。二人ともである。そしてHさんが昨日から聞いたがっていたデータバンクは、概念が知られているだけで存在しないという答えだ。昨日からどうもずれるはずだ。多分、キエフ発の情報も伝わっていないのだろう。

Hさんもその後、甲状腺の例を引きながら以前よりどのくらい増えたか聞いたが、データの答えは無い。しかし、アルチュフさんはこういう言い方だ。昨年、州で子供の甲状腺がんが1件、今年前半に、悪性(ガン)か良性か分からないが7件見つかった。ヨウ素がふってきたから甲状腺障害は必ずあるはずだと。過去のデータが存在しないのだろう。増えていることは、医療現場の実感なのだ。進行役のOさんが、医療機器のことを聞き始めた。医療設備の水準が日本と比べると比較にならないらしい。アルチュフさんの病院では超音波診断装置は1台しかないらしい。胃カメラは今年になって初めて日本から入ったと言う。州で一番の病院である。また、いろんな検査を、手作業でやっているとも言っている。時間がかかるのだ。だから検査もせず、治療にかかることがあるという。

医療機器さえあればということだろう。ここは、医療現場を知る者たちでない実感がつかぬない。やっと医療者同士の話しになってきているのだ。Oさんが薬品名をあげて、ソ連で手に入りにくいとか聞き始めた。門外漢の私など、やっと名前を知っているぐらいのものだ。ガンマグロブリン製剤。それに対するアルチュフさんの答えがふるっていた。何が足りないかというより、あるものを言った方が早い。一同笑いである。でも深刻。ソ連では足りているものを答えることはできないと言う。物にあふれた私たちには、どうも想像しにくい。

ネチポレンコさんは持病の耳のことを持ち出して、こういう言い方をされた。患者の立場としてである。一週間に一度脱脂綿が要る。脱脂綿でさえ、5つも6つも薬局をかけめぐってジトミールの半分をかけまわらなければならないことがある。それでもみつからないことがある、と。人口は宮崎市よりちょっと多いぐらいの都市である。そういえば、外国人がソ連に行って最初に覚える言葉の一つが“行列”のはずだった。本当にものがないのだ。アルチュフさんは、中古の医療機器でもいいから欲しいと強調されていた。

さて、私も聞いたかったIAEA報告のことである。川原さんが聞き始めた。連邦政府や共和国政府、そして人々はどう思っているかである。IAEAの調査員が検査に来たのをみたことがないという。ジトミールで使われている放射能地図は飛行機から測ったものらしい。あるいは5km・10km行ったら車を止めて測り、作成されたものと言う。それも空気中濃度だけみたいだ。空間線量のことだろうか？ 放射能被ばくには外側からの被ばくと内側からの被ばく、つまり体外被ばくと体内被ばくがある。体の中に取り込んでしまうと

やっかいだ。外からだと逃げればいい。もっとも、まわり中汚染されていたら、どこにげていいのやら。IAEAが本当に被災現地のことを考えているなら、食べ物など口にすることは必ず測定されなければならないはずだ。あるいは、いろんな核種についても調べなければならない。チェルノブイリ事故後、ヨーロッパで生まれた子供が最初に覚えたといわれるセシウムのほかにもストロンチウム、プルトニウムetc. etc.。

例えばストロンチウムは、セシウムに比べ毒性が50~100倍も強かったはずだ。それに放射能のホットスポットの状況は、狭い範囲でさえあるはずだ。半減期も体に蓄積される部分も、それぞれ違う。1平方キロ単位のレベルだけでは、いかにも荒っぽすぎる。いつかテレビで見たことがあったが、道の真ん中と端とでさえ、汚染の強さが違う。雨ドイの中などすごい汚染だった。ネチポレンコさんも同じようなことを指摘した。そうだから当然、住民はIAEA報告に怒りをもって受けとめたという。しかし、IAEAは都市の真ん中をちょっと測って居住可能だと言ったという。住民は怒るはずである。それで共和国政府は、IAEA報告は正しくないと認めたのだ。ウクライナ共和国政府のことである。白ロシアもそうである。連邦政府はIAEA報告を歓迎したらしい。共和国に押し付けようとしたみたいだ。しかし、主権宣言後は、共和国政府の決定が連邦政府の決定より優先するそうである。いずれしろ、IAEA報告は事実をねじ曲げている。

今日の交流会は、昨日の講演会よりずっと楽しい。アルチュフさんが足を揺すっている。私も後はあまり覚えてないから、パスして交流会は気持ちよく終わったことにしよう。詳しいことを知り

たい人には、記録集でも読んでもらうことだ。

(略)

◎報告文に変えて、私的日誌「ウクライナ共和国  
ジトミール発 ネチポレンコ/アルチュフ便」より  
抜粋しました。読みたい方は、少し残部あり。  
尚、「講演・交流会記録集」も9月15日完成予定。

〒880 宮崎市下北方町塚原5821-3

Phone・Fax 0985-28-2587

青木幸雄

